

ホワイトヘッドにおける直接知覚と表象

平田一郎

関西外国語大学短期大学部

現代の知覚論において、直接知覚ということが重要な問題になっている。例えばギブソンの生態学的知覚論がそうであるし、選言主義がセンスデータを否定する時、素朴实在論と結びつき否応なしに直接知覚を含意することになる。

そのような状況でホワイトヘッドの知覚論を再考する時、彼の知覚がまず直接知覚を主張しているということは興味深い。実際「因果的効果」(causal efficacy)において、直接知覚が明言されている。それは同時にそこで知覚するそのままに世界が実在している、あるいはむしろ世界のありかたに知覚が順応している(conform)という言い方に明らかなように、素朴实在論を主張していることにもなる。ここで重要なのは、外界の情報を取り入れるというだけでなく、世界の在り方における事象同士の一般化された相互関係の典型として知覚が主張されているということである。即ち彼の「直接知覚」は、「物」同士の相互関係、例えば物同士の物理的因果関係と同等のものとして規定されている。

このことは、外界の物と内的な心的対象との間に本質的な違いはないという彼の實在についての考え方に由来する。それは世界を「もの」としてではなく「こと」としてとらえるとともに、その「こと」が生成消滅する「過程」であるという世界観に由来する。こういった「過程」は「経験の活動」(act of experience)として全て「経験」とみなされている。こうした「経験」はすべて物的であるとともに心的であるとされる。すると「物」同士の関係も「経験」同士の関係とされる。ホワイトヘッドにとっては、過去の私を現在の私が引き継ぐ—経験する「内的経験」と、外物を知覚する「外的経験」との間に本質的な違いはない。あるいは身体器官が外物を感知し—経験し、その外物を感知した身体器官を今現在の「私」が経験する—具体的には神経系における信号の伝達といった形で—ということに違いはない。

もっとも、こういった経験について従来のホワイトヘッド解釈者たちは、サブアトミックな微細な事象同士の関係として考える。その場合最終的に知覚する主体は脳の中の微細な生起ということになる。それは近年の認知科学における心のイメージと一致するものとなってしまふ。しかしわれわれはここではウォラックの解釈に従い、むしろそういった微細な生起とともに、マクロな生起も経験となしうる、丁度ギブソンにおけるような「経験」の入れ子構造を考えたい。その場合は、まさにそういった経験が重なり合いながら、相互に関係していくであろうし、「心」も脳髄に限定されないより大きな生起としてもとらえることができるであろう。

しかしホワイトヘッドの知覚論は、こういった因果的効果における直接知覚につきるだけではない。確かにこの直接知覚はより原初的であらゆる生起に共通するものであるが、人間のようなより高度な有機体においては、より鮮明で空間的に確定された「現前的直接態」(presentational immediacy)の知覚もある。これは外物に由来しそれを指示する「永遠的客体」(eternal object)を、心が空間的に投射して生じる知覚の

様態である。この知覚における個々の要素の永遠的客体をホワイトヘッドはまた「感知与件」(sensum)と称している。そしてこの現前的直接態の知覚を因果的効果の知覚に関連付けるのが「象徴的関連付け」(symbolic reference)とされるのであるが、こういった現前的直接態が因果的効果に順応するのが真理であり、その限りで自らの哲学は真理の対応説をとっているとさえいう。

こういった感知与件は心が内部に投射するとともに、その感知与件が外部の直接知覚たる因果的効果に象徴づけられているという点でまさに「表象」(representation)に他ならないかに思われる。さらにこういった「表象」ゆえに、高度な有機体に過誤を可能にするとして、そこに現前的直接態の有用性の根拠を見出す。特に「時間差論法」(time-lag argument)に対しても、この二つの知覚の様態の違いは重要である。即ち因果的効果においては過去の生起である何光年も離れた星の瞬きを「現在」の星の瞬きと知覚するという事は、因果的効果における過去の星を、現前的直接態において、それを指示する感知与件を現在の知覚の対象としているということに他ならない。

このような限りで、ホワイトヘッドの知覚論において「直接知覚」は後退し、むしろその本質は「表象」による知覚と見なされるかもしれない。実際現前的直接態があって、それが因果的効果に順応するかどうかで真正な知覚と錯覚、幻覚とを区別するという解釈に立つならば、ホワイトヘッドの知覚論は、明らかに選言主義とは異なる古典的な感覚与件説に類するものと見なされるかもしれない。

しかしここで、因果的効果が原初的であり、現前的直接態は我々人間にとってこそ明晰であるものの、一部の高度な有機体にのみ存在し、また過誤を可能にして新たな可能性を開くという点で有用なものとみなされているということに注目せねばならない。しかも因果的効果の知覚において真正な知覚が外物との関係がある限りでの過程であるのに対して、幻覚や錯覚は身体内でのみ完結する過程としての経験の活動に過ぎないという形で真正な知覚と錯覚、幻覚が区別されるのであり、現前的直接態との関係はそれに付随的なものでしかないのである。その限りでホワイトヘッドの知覚論の本質は因果的効果における直接知覚論にあると見なさねばならない。

参考文献

- Riffert, F. (ed.)(2007) *Perception Reconsidered*, Frankfurt am Mein: Peter lang
- Wallack, F.B. (1980) *The Epochal Nature of Process in Whitehead's Metaphysics*, Albany: State University of New York Press.
- Weber, M. and Weekes, A.(ed.)(2009) *Process Approaches to Consciousness in Physiology, Neuroscience, and Philosophy of Mind*, Albany: State University of New York Press
- Whitehead, A.N. (1985/1927) *Symbolism, Its Meaning and Effect*, New York: Fordham University Press. 藤川吉美他 (訳)、『理性の機能・象徴作用』[ホワイトヘッド著作集第八巻] 1981,松籟社
- (1978/1929) *Process and Reality*, Corrected edition, New York: The Free Press. 平林康之 (訳)、『過程と実在』1,1981, 2,1983, みすず書房
- (1968/1938) *Modes of Thought*. New York: The Free Press.藤川吉美他 (訳)、『思考の諸様態』[ホワイトヘッド著作集第 13 巻]1980, 松籟社